「あはっ♡　慎吾くん久し振り～♡　また会えて嬉しいなぁ♡　最近は来てくれなかったから、さやにもう飽きちゃったのかと思ってたよ～♡」

新発売の円盤と写真集を買って並んだ握手会の列。やっと僕の番になって沙耶香ちゃんと対面すると、彼女は開口一番にそんな事を言い出す。

「そ、そんなことないです……♡」

「へぇ～？　それなら良いんだけどね？　彼女が出来て、さやより優先してたんじゃないのかなぁ～？」

ほとんど一年振りに足を運んだイベントで、僕はかつてガチ恋するほど熱を上げていたグラビアアイドルで、春香さん……元カノの妹である沙耶香ちゃんに会いに来ていた。

すっかりトレードマークになった赤いリボンで黒髪をツーサイドアップにし、可愛いらしい童顔を破顔させる水着姿の沙耶香ちゃんに僕はドキドキしてしまう。

パステルピンクのビキニを着た沙耶香ちゃんは可愛らしいだけでなく、布面積の小さな水着で自慢のおっぱいを露出しており、どうしても視線はそちらに吸い込まれてしまう。

爆乳、と呼んで差し支えないおっぱいはただ大きいだけでなく、やわらかそうな長乳。それでいて垂れることなく整っている様子に、見惚れずにはいられない。ビキニの紐は今にも切れそうなほどに張っている上に、僅かに乳房に食い込んでいるところからも、彼女のおっぱいのボリュームを見て取ることができた。

もちろん、乳房の長さに伴って谷間も長く、深々としており、乳肉の隙間からは甘い匂いが微かに漂ってきている。映像や写真では決して味わえない、沙耶香ちゃんのフェロモン。

ただそこにいるだけで男を惑わし、魅了する魔性の女の子。それが沙耶香ちゃんというグラビアアイドルであり、僕は彼女に魅了された哀れな雄なのだ。

「まぁ、こうしてさやの所に戻ってきてくれたから良いけど♡　これからもぉ、たっくさん応援よろしくね～♡　ね？　慎吾くん♡」

両手で僕の手を握った沙耶香ちゃんが、満面の笑みを向けると同時にむぎゅっと腕で胸を圧迫して谷間を強調してくる。盛り上がった乳肉は水着からはみ出し、やわらかそうに歪む。

（ああっ……♡　すごい……♡）

目の前で見せつけられる爆乳の誘惑に、僕の下半身はムズムズと疼いて視線はおっぱいから離せなくなる。

「くすっ♡　慎吾くぅん？　モジモジしてどうしたの～？　さやと久し振りに会って緊張しているのかな～？」

僕が興奮していることを見抜いた沙耶香ちゃんがくすくすと笑い、そっと耳元に口を寄せて来る。

そして、誰にも聞こえないほど小さく、それでいて可愛らしく「この後、よろしくね♡」と耳打ちしてくるのだった。

※

「お待たせ～♡　さやのガチ恋勢に逆戻りしちゃった、金ヅルマゾの慎吾くん♡」

イベントの後、指定されたビジネスホテルの一室でベッドに腰掛けて待っていると、約束通り沙耶香ちゃんが制服姿で現れる。先ほど見た、妹系グラビアアイドルとしての可愛らしい彼女ではなく、男を誘惑して金銭を貢がせて

利用する悪女としての貌で。
「今日は何を持って来てくれたのかなぁ～？」
紺のブレザーをぱつぱつに張らせている豊満なおっぱいをわざと揺らしながら、沙耶香ちゃんはニヤニヤと意地悪く笑う。ちょっとでも誘惑すれば、僕が簡単に貢いでしまう事を彼女は完全に理解しているのだ。
「前回はクリスチャン・〇ブタンのリップだったよね？　慎吾くん、流石にお姉ちゃんの元カレだけあって貢ぎ物のセンス良いし、さやも楽しみにしてたんだよぉ～？」
ぽふん、と僕の隣に腰を落とした沙耶香ちゃんがにっこりと笑顔を向けてくる。お尻はくっつかない程度の近さであるというのに、彼女の胸は大きすぎて僕の肘にむにゅりと触れてくる。
（あううっ♡　おっぱいやわらか……♡）
力を入れて押したわけでもなく、本当にただ触れただけだというのに簡単に肘が沈んでしまうほどの柔乳に、僕は一瞬で魅了されてしまう。
今すぐ自分から沙耶香ちゃんのおっぱいに顔を埋め、思い切りフェロモンを嗅ぎたい。ぱふぱふで脳みそをクラクラさせられてから、パイズリで夢心地に射精したい。代償にどれだけのものを失ったとしても。
乳房に肘先を密着してしまっただけで、僕の頭の中はそんなことでいっぱいになる。
（だ、ダメだ。僕は今日……）
誘惑に流されて負けそうになるのをなんとか踏み止まる。。僕は今日、どうしても沙耶香ちゃんの誘惑に負けてはいけない理由があったのだ。

「も、もうやめようよ、こんなこと……。沙耶香ちゃんのためにもならないよ……」
密着していた胸から腕を離し、沙耶香ちゃんに向き直って言う。
自分の懐が痛いのももちろんあったが、それ以上にファンとして彼女の行いについて心配になったのだ。
大人気グラビアアイドルとして今や知名度もメディアへの露出も増えた彼女にとって、このような行為はいつか弱みになる。そう考えて彼女に伝えるべく、僕はイベントに足を運んで、言われた通りホテルで待っていた。
「どうしてこんなことするのさ？　沙耶香ちゃんほどのグラビアアイドルなら、お金なんて困らないだろうし……」
真剣に沙耶香ちゃんを心配している僕の言葉を、彼女は鼻で軽く笑って言う。
「慎吾くん、本当にわかってないよね～♡　そんなんで、さやのガチ恋ファンって言えるのかなぁ？」
「ど、どういう……？」
僕の腕を抱いて身を寄せた沙耶香ちゃんが、むぎゅうっとおっぱいを押し付けてくる。
比較的硬い生地で縫製されているブレザー越しだというのに、たわわに実った乳房のやわらかさをしっかりと伝えられてしまい、僕はドキドキする。
「さやがこーゆーことするのは、お金目当てな訳じゃないんだよ？　慎吾くん、ずっとさやを推しているのにまだわからないの～？」
むにゅ♡　むにゅ♡　ふよん♡　ふよん♡　とおっぱいのやわらかな感触を腕に伝えてきながら、沙耶香ちゃんが瞳を潤ませて上目遣いで見つめてくる。
（ううっ……かわいい……♡）

美少女と呼んで差し支えない、他の芸能人たちと比べても圧倒的な可愛さを誇る沙耶香ちゃん。見つめられたらどんな男も好きになってしまう彼女の視線を間近に受け、ドキドキがいっそう激しくなる。

見つめて微笑んだだけで男を恋に落とせる彼女の笑顔に、既にガチ恋をしてしまっているにも関わらず、僕はもう何度目かの恋をしてしまいそうになる。

「も、もしかして沙耶香ちゃんがこんな事をするのって……♡」

「ん～♡　気付いちゃったぁ？　そうだよぉ～♡　さやはぁ、慎吾くんのことが好きだから、こんなことしちゃうんだよぉ♡」

きゃはっ♡　と言ってとびきりの笑顔を向けてくる沙耶香ちゃんに、僕は更に深く恋をしてしまう。

「そうじゃなかったらお姉ちゃんから奪ったりなんてしないよぉ～♡　それとも慎吾くんはぁ、さやのこと好きじゃないの？」

「す、好きですぅ……♡」

沙耶香ちゃんに見惚れ、くらっとした一瞬の隙を突かれて僕はベッドに押し倒される。

「え～いっ♡　慎吾くんの大好きなおっぱいだよぉ～♡」

抵抗する暇もないうちに、僕の上に覆い被さってきた沙耶香ちゃんが、豊満なおっぱいで顔を圧迫してくる。

上からのし掛かられているせいで逃げ場はなく、僕はブレザーの生地越しに与えられる爆乳の感触にあっという間に夢中になってしまう。

（あううっ♡　おっぱい♡　おっぱい♡）

ブレザーの硬めの生地が全く気にならないほどやわらかいおっぱい。ふわふわとした柔乳肌の感触を顔面で味わっている内に、股間が疼き出す。

「あははっ♡　おっぱいで潰してあげただけですぐに抵抗出来なくなっちゃったね～♡　ちょっろ～い♡」

嘲笑うような沙耶香ちゃんの声を聞いても怒りは覚えない。それどころか、バカにされていることに興奮してしまう始末。僕はすっかり、彼女によってマゾになってしまっていた。

「慎吾くんってさぁ、ほんっと～におっぱいにすぐ負けちゃうチョロ雑魚マゾだよね～♡　さや、助かっちゃうな～♡」

くすくすと笑いながら話す沙耶香ちゃんの下で、僕は自分から彼女の胸に頬擦りをしてしまう。服の隙間から漏れてくる微かな甘い匂いに、唾液が止まらなくなる。

制服越しではなく、直接沙耶香ちゃんのおっぱいに触れたい。ふわふわのおっぱいに押し潰されて、谷間に篭った甘いフェロモンをたっぷりと嗅がせてほしい。そんな欲求がむくむくと湧き上がり、ペニスが勃起していく。

「もう負けちゃうねぇ～♡　弱いねぇ～♡　でもぉ、お貢ぎしてないのに気持ちよくなっちゃダメだよぉ～？　慎吾くんはさやの金づるマゾなんだから♡」

金づるマゾ、という言葉に反応してペニスがより強く勃起する。

「ほぉらほぉらぁ～♡　さやの生おっぱいでぽふぽふされたくないの～？　やわらか～いおっぱいに包まれてぇ、あま～いおっぱいフェロモン、嗅ぎたくないのぉ？　すぐに脳みそ壊してあげる♡」

「あうう……♡　な、なんで……♡」

沙耶香ちゃんは僕のことが好きだから意地悪をしていたんじゃないのか……という戸惑いすら、脳みそを染める

甘らかな匂いに溶かされていく。
「あはっ♡　本当にさやが慎吾くんのことなんか好きだと思ったの？　夢見過ぎ～♡」
「そ、そんな……♡」
彼女の言葉にショックを受けているはずであるにもかかわらず、僕は余計に興奮してしまっていた。
「さやはね～、お金が欲しいからでも、慎吾くんが好きだからでもなく、楽しいからやってるの♡　慎吾くんみたいな弱～い男のことをちょろ～く負けさせて、さやの奴隷として扱うのが楽しくてたまらないんだよ♡」
奴隷。沙耶香ちゃんに金銭を貢ぎ、恋心を弄ばれて利用される存在。
悔しいはずなのに、怒りを覚えるはずなのに、僕は彼女との圧倒的な格差に興奮してしまっていた。
「だからさ～ぁ♡　もっと楽しませてよ♡　さやを退屈させないで♡」
僕の股間へと手を伸ばした沙耶香ちゃんが、ついーっと膨らんだ股間を指先で撫で上げる。それだけで腰が跳ね、ペニスは硬く勃起しているのに頭から爪先までは弛緩しまう。
「慎吾くぅん♡　さやね～、お仕事ですっごくフェロモンとストレスが溜まっちゃってるの♡　だからさぁ～、慎吾くんをいじめて発散させてよ♡　お姉ちゃんを裏切ってガチ恋ファンになっちゃったほどだ～い好きなさやのお願い、聞いてくれるよねぇ～？」
（ふぇ、フェロモン……♡）
沙耶香ちゃんの豊満な乳房の谷間に溜まった甘いフェロモン。制服のブラウスとブレザーを隔ててもなお香ってくる芳しい匂いを、直で吸い込んでしまったなら……。

（きっと完全に沙耶香ちゃんの奴隷に堕とされちゃう……♡）

そうわかっているはずなのに、すっかり彼女の虜になってしまっている僕は抵抗し用とする気が起きない。それどころか、彼女のフェロモンに溺れてしまいたいとすら思えてくる。

「今日のお仕事のせいでさ～、汗とフェロモンがすごいことになっちゃってるの♡　そんな嗅いだら、きっと慎吾くんも今よりずっとお馬鹿さんになっちゃうけど、良いよね～？　だって、さやの奴隷でいられるんだもん♡」

すりすり、すりすりとズボンの上から指先で膨らんだ股間を撫で回しながら沙耶香ちゃんが問い掛けてくる。

「でも～、さやのことが嫌いで～、金づる扱いが嫌なら帰っていいよ？　お姉ちゃんに泣きついてもう一回付き合ってもらえばぁ～？」

そう言って沙耶香ちゃんが身体を持ち上げ、僕の顔からおっぱいを離してしまう。

心地良い圧迫感とやわらかな感触、甘い匂いが離れていってしまったことに、心が酷く落ち着かなくなり、自然と首を上げて沙耶香ちゃんのおっぱいを求めてしまう。

その時、猫目を細めて見下している沙耶香ちゃんと目が合った。

ニヤ、と笑う沙耶香ちゃん。その笑みが、僕の内心を完全に見抜いている事を物語っている。

「負けちゃえば良いじゃん♡」

鼻で嘲笑いながら、沙耶香ちゃんが言う。

「さやのおっぱいに負けたいんでしょ～？　負けさせてあげるよ♡　好きなだけ♡」

言いながら、沙耶香ちゃんは僕に覆い被さりながら片手でブレザーのボタンを外す。

バサ、とブレザーが開くと、中に閉じ込められていたおっぱいフェロモンの甘い匂いが漂い出す。鼻腔をくすぐる芳しい匂いとブラウスに包まれたおっぱいの迫力に、僕はもう理性が保てない。

「それとも慎吾くんはもう負けさせてほしくないのかなぁ～？　さやが奴隷くんで遊ぶのやめたら、もう慎吾くんとも会えなくなっちゃうよー？　それでも良いのかなー？」

ブラウスのボタンに手を伸ばした沙耶香ちゃんが、僕の答えなんてわかりきった様子で尋ねてくる。左手を添えているボタンを外せば、彼女の深々とした谷間を見ることができるだろう。

（谷間、見たい……♡　フェロモンも嗅ぎたい……♡）

写真集や映像では感じ取ることの出来ない、沙耶香ちゃんの甘いおっぱいフェロモン。それを間近で、先ほどまでより深く嗅ぎたいという欲求に抗えない。

ずっと前からファンとして魅了されており、恋人を裏切って金づるマゾに堕とされてしまった僕にはもう、沙耶香ちゃんのおっぱいの感触や匂いの誘惑を跳ね除ける力なんてかけらも存在していなかった。

「さ、どーする？　このまま帰る？　それともぉ、さやのもちもちIカップおっぱいに負けさせてもらう？　さや今日ね～、すっごく谷間が蒸れてるの♡　やわらか～いおっぱいのふわふわな谷間にいっぱい汗かいちゃってるからぁ、顔に思い切り押し付けたらそれだけで射精できちゃうかもよぉ～？」

そう言って沙耶香ちゃんは制服のリボンを取り、ブラウスの第一ボタンも外す。

「ぱふぱふで射精して～、さやのことがだ～いすきな奴隷くんらしく負けちゃおうよ～♡　さやのおっぱいで頭の中めちゃくちゃに壊して、一生おっぱいマゾのお馬鹿さんにしてあげるから♡」

開いた襟から覗く、深々とした谷間と真っ白な乳肌に、綺麗な鎖骨。鼻から流れ込んでくる甘い匂いはおっぱいフェロモン。沙耶香ちゃんにすっかり負け癖をつけられてしまっている僕は、呆気なく魅了されてしまう。

それを自覚した瞬間、僕は自然と答えてしまっていた。

「負けるぅ♡　負けさせてください♡」

「あはっ♡　マゾスイッチ入っちゃったねぇ♡　今からおっぱいに負けさせられちゃうんだ～って想像して我慢出来なくなっちゃった？　ほ～んと、ちょろくて助かっちゃう♡」

くすくすと沙耶香ちゃんが笑うのに合わせておっぱいが目の前でふよふよと揺れ、僕は我慢できなくなる。早く彼女の爆乳に潰されてたっぷりとフェロモンを嗅がされて壊れたい。心の底からそう願ってしまう。

「いいよ～♡　さやのおっぱいでお馬鹿さんになって、いっぱいさやを楽しませてね♡　笑ってあげるから♡」

プツ、プツ、プツ、と続け様に沙耶香ちゃんがブラウスのボタンを外していく。

少しずつ露わになっていく白い乳肌と、長い谷間。ボタンがすっかり外れてブラウスが開くと水着に包まれたままのおっぱいが現れ、ふわぁんっと甘い匂いが立ち込める。

「あうう……♡」

「モロに嗅いじゃった？　ダメだよー？　簡単に壊れちゃったら。壊し甲斐がないから♡」

そんなことを言われても呼吸を止められるはずもなく、身体はおっぱいフェロモンを求めて鼻で深呼吸を繰り返してしまう。

「あっは♡　だめって言ってるのに壊れたがっちゃってるんだ♡　それじゃあ、さやのおっぱいで一気にお馬鹿さんに

してあげるね～♡」
重力に惹かれて長くなった乳房をゆっくりと落とし、沙耶香ちゃんは僕の顔を深い谷間の中にしまい込む。
「んんんっ♡」
ふわふわもちもちの柔乳肌の感触と、制服の中で蒸らされたおっぱいの熱を顔面で味わい、一気に興奮が高まる。
しっとりと吸い付いてくる乳肌から温かな熱が顔へと伝わり、谷間の中で思考が溶かされていく。
そうして緩みきったところへ流れ込んでくる甘いおっぱいフェロモンに、僕はもう胸も頭の中もすっかり染められてしまう。
「くすっ♡　ちょ～っと顔に乗せてあげただけでもうメロメロになっちゃってるの？　まだまだもーっと、おっぱいで潰されちゃうんだよ？」
（おっぱい♡　沙耶香ちゃんのおっぱい♡）
甘ったるいおっぱいフェロモンを胸いっぱいに吸い込んでいると、沙耶香ちゃんが完全に体重を預けてのしかかってくる。
谷間の中で豊満なおっぱいの乳肉に顔面を完全に覆われ、鼻先の僅かな隙間以外は全てもちもちの乳肉に埋め尽くされてしまう。
「ふっ♡　うっ♡　んんんっ♡」
乳房が密着しあっている深い谷間の奥に篭った甘い匂いを嗅いでいると、どうしようもなくドキドキしてくる。更には頭の中で、脳みそがキュンキュンとする不可思議な快楽を覚える。

「あーあー♡　さやのおっぱいフェロモン嗅いでどんどん脳みそ壊れちゃってるねぇ♡　おっぱいから出してあげる頃にはもう、一生さやのおっぱいに勝てないマゾに堕ちちゃってるだろうな～♡」

楽しそうに笑いながら、沙耶香ちゃんはむぎゅむぎゅとおっぱいを僕の顔に押し当ててくる。その度に谷間の奥から温かなフェロモンが漏れてきて、僕の頭を痺れさせる。

「ほ～ら♡　おっぱいぱふぱふ♡　むぎゅむぎゅ♡　おっぱいフェロモンに負けて腰へこへこさせちゃってるの、なっさけなぁい♡」

鼻から流れ込んできて肺と脳を侵すおっぱいフェロモンのせいで狂いそうなほどに興奮している僕をさらにいじめるべく、沙耶香ちゃんは乳肌を顔面に擦り付けてくる。

頬にピッタリと密着した温かな柔乳肌がむにゅむにゅ、もにゅもにゅと僕の顔をもみくちゃにし、その度に乳肌が擦れて甘いフェロモンが香る。

嗅いでいるだけで口の中に甘さを覚えてしまうほどのおっぱいフェロモンに、歯がじんわりと浮いてくる心地を覚える。

（おっぱい♡　おっぱい♡　沙耶香ちゃんのおっぱい♡）

もちもちふわふわのおっぱいに包まれながら、吸う空気はもちろん吐く息すら甘く染められてしまった状態で僕はズブズブと彼女の魅力に沈み込んでいく。

すっかり溶かされ、思考出来なくなった頭脳はおっぱいフェロモンに反応して官能を覚える性感帯に成り下がる。

キュンキュンと甘い痺れを頭の中に感じるたび、はちきれんばかりに怒張したペニスが我慢汁を漏らす。

ただおっぱいに包まれて匂いを嗅がされているだけ。だというのに興奮が青天井に高まり続けるばかりか、股間がムズムズと疼き出す。最初に軽く撫でられて以降、一切刺激を与えられていないにも関わらず。

（おっぱい♡　あまっ♡　あまいっ♡）

濃厚なミルクに数滴の柑橘の果汁を混ぜたような、おっぱいフェロモンの甘い匂い。脳髄を溶かしてひたすらに興奮を誘うその匂いによって、僕のペニスはビクンビクンと震えてしまう。

もしもここで少しでもペニスに触れられたら暴発してしまう。となったところで、沙耶香ちゃんが身を起こして胸を僕の顔から僅かに離す。

これ以上はしてくれないのだろうか、と思っていると、しかし沙耶香ちゃんは自分の手で乳房を持ち上げ、下乳を見せつけてきた。

「はううっ♡」

もわぁっと下乳と身体の隙間に閉じ込められていた湯気が立ち上り、僕の顔をじっとりと温める。

湿った熱気が鼻に入り込み、その甘さに湯気の正体がおっぱいフェロモンであることを察した時には、脳みその中で快感の火花が散ってペニスはピュルピュルと我慢汁を漏らしていた。

「そういえば～、今日は谷間よりこっちの方が蒸れちゃってるんだよね～♡　さやのおっぱいの中でも一番ふわっふわでやわらか～いところ、慎吾くんに味わわせてあげよっか？」

新雪のように純白な下乳肌の上を、乳汗の滴が幾筋も滑り落ちていく。

間近で滴る甘露に見惚れていると、重力に導かれて雫が僕の口へと落ちる。

舌先に触れて弾けた瞬間、口内にひたすらに甘い匂いが広がり、鼻を抜けていく。たったの一滴なのに、僕の口の中を満たした甘さはいつまでも残って消えていかない。

「こんなに蒸れ蒸れになって甘い匂いさせちゃってる下乳を顔に押し付けたら、もう一生さやのおっぱい奴隷決定だけど～、良いよね？　慎吾くんはさやの奴隷なんだから、どうするかはさやの自由でしょ？」

「お願い♡　お願いしますっ♡」

自分から彼女のおっぱいを、おっぱい奴隷になってしまうことを望んでしまう。自分がどうなろうと構わないと思えてしまう。それほど、沙耶香ちゃんの下乳おっぱいフェロモンは強烈だったのだ。

「くすっ♡　自分から壊されたがっちゃうなんて、ほ～んとちょろくてお利口♡」

挑発的な笑みを浮かべた沙耶香ちゃんは下乳の付け根が僕の鼻に当たるようにおっぱいを下ろし、「おっぱいで脳みそ壊されてイケ♡」と言って僕の顔を再びおっぱいで押し潰す。

「んんんんんんっ♡♡」

どくんどくんどくんっ♡♡　どぴゅどぴゅっ♡♡♡

「あはははははっ♡　慎吾くん、さいっこう♡　下乳押し付けた瞬間に射精しちゃったねぇ～♡　これでもうさやのおっぱいに一生勝てないの決定～♡　せいぜい奴隷として頑張れ～♡」

温かな甘露に濡れた熱い下乳がピッタリと顔面を覆い尽くし、首まで柔乳肌に沈み込む。

甘くて濃厚な匂いととろけるやわらかさ、おっぱいの熱と重量感を一気に覚えた瞬間、僕は腰をガクガクと震わせて射精してしまっていた。

（あああああっ♡　きもちっ、きもちいいっ♡）

顔中が甘いおっぱいフェロモンと乳汗に塗れて濡れた状態で射精する度、甘いおっぱいフェロモンが脳味噌に浸透していくのを感じる。

「おっぱい押し付けて振るわせてあげるから～、さやのフェロモンしっかり嗅いでね♡　もう洗っても取れなくなっちゃうかもしれないけど～♡」

沙耶香ちゃんがむぎゅっとおっぱいをさらに強く押し付けてきて、そのまま押し付けている手でおっぱいをブルブルと震えさせる。

「んんんんっ♡　んんっ♡♡」

むぎゅむぎゅむちゅむちゅと柔乳が顔の上を滑り、たっぷりと溜まった下乳汗が淫靡な水音を立てる。

キュンキュンと頭の中が縮むような快感と脳細胞がフェロモンに染められていく快楽に溺れ、僕はそのまま何度も何度も射精し続けていく。

「いいねいいね～♡　どんどん壊れて、さやのおっぱいに洗脳されちゃってるね～♡　さや、す～っごく楽しいよ～♡」

沙耶香ちゃんの言う通り、射精したり脳みそが疼くたびにどんどん彼女に深く魅了されてしまっているのを感じる。

それからどれだけ射精しただろうか。ようやく沙耶香ちゃんが身体を起こして僕から離れても、甘い匂いとおっ

ぱいの温かさは離れずに残り続けている。
「どーするー？　もっとお貢ぎするって言うなら、パイズリしてあげても良いけどぉ？　もう射精できる精液残ってないかもしれないけどぉ♡」
意地悪く笑いながら、沙耶香ちゃんは大きな長乳を左右から手で持ち、たぷたぷむぎゅむぎゅと動かして誘惑してくる。完全に彼女のおっぱいの虜に落ちてしまった僕何度も射精した後だというのに勃起してしまう。
「しますっ♡　お貢ぎしますっ♡　だから、パイズリしてくださいっ♡」
「うわ、ちょっろ♡　慎吾くんってほんとパイズリ好きだよねぇ～♡　さやのパイズリに負けて～、お姉ちゃんのこと裏切っちゃうほどだもんね～♡」
沙耶香ちゃんの言葉に、彼女のパイズリに負けてしまった日のことを思い出してしまう。同時に、その時の快感も鮮明に。
「そーだなー。慎吾くんさぁ、クレジットカード持ってる？　あっ、持ってるんだ。じゃあ、それをさやにちょうだい♡慎吾くんのお金、さやが使ってあげる♡」
「はいっ♡　はいっ♡　差し出しますぅ♡」
尻ポケットに入れていた財布の中からカードを取り出し、沙耶香ちゃんに手渡す。
「あはっ♡　ご主人様の言うことすぐに聞けて偉いね～♡　じゃあ、ご褒美にパイズリしてあげるから、とっとと脱ぎなよ♡」
ご主人様の言うこと聞けてえらいね、と言う言葉に心から喜びを覚えてしまう。きっと、沙耶香ちゃんのおっぱい

フェロモンによって洗脳されてしまったせいだろう。
ズボンを脱ぎ終え、ベッドの上に立つ。正面には正座した沙耶香ちゃんがおっぱいを両手で持ち上げて構え、すぐにでも僕のペニスを深々とした谷間の中にしまい込めるようにしている。
「さや、お仕事で疲れちゃったから～、慎吾くんが自分で腰振って勝手に負けてね♡」
「わ、わかりましたぁ♡」
勃起してピィンと立ったペニスに手を添え、沙耶香ちゃんの長乳の谷間に挿入していく。
「あああ……♡　きもちいい……♡」
やわらかなおっぱいがみっちりとペニスを包み込み、柔乳肌が吸い付いてくる感触がたまらない。
温かく、湿った谷間の心地良さと柔乳の快感に負けて腰が引けそうになるのを堪えながら、ペニスを谷間の奥へと進ませる。そのせいで軟乳の感触をじっくりと味わうことになり、根元まで挿入し終える頃には射精欲が高まりきっていた。
「あはっ♡　もうおちんちんビクビクしてるの、だらしなぁい♡　そんなんじゃすぐに射精しちゃうね～♡」
暴発してしまわないように必死になって下半身に力を入れ、腰を振り始める。谷間汗とすべすべの乳肌、それからペニスに纏わりついた白濁液のおかげでスムーズに動け、結果的に快感は強まってしまう。
「へこへこへこへこ、みっともないねー♡　情けないねー♡　おっぱいに負けるの気持ち良いねー♡」
からかい口調で笑う沙耶香ちゃんのおっぱいに、貪るようにペニスを前後させる。奥へと突くたびに豊満な乳肉がむにゅうんと股間の隙間を埋め、陰嚢がたぷたぷと乳房に当たるのが快感を促進させる。

乳房が長いせいで谷間が深過ぎて、どれだけ奥へ向かってペニスを突いても全く胸板には届かない。その上、引くたびに柔乳肉がにゅるにゅると絡み付いてきてペニスと僕の脳髄を蕩けさせてくる。

（おっぱい♡　おっぱい好きっ♡　もっと味わっていたい♡）

ぱちゅん、ぱちゅん、と音を立てながら沙耶香ちゃんの長乳に向かってひたすらに腰を振り続ける。すると、沙耶香ちゃんはふわぁとあくびをひとつ、可愛らしく漏らした。

「さや、もう飽きちゃった♡　今すぐ射精して？」

気まぐれに冷めた態度になった沙耶香ちゃんが、おっぱいを押さえているだけだった手で乳房を圧迫する。強烈な乳圧に、敏感な性感帯が集まった亀頭が潰される。

「イケ♡　イケ♡　イケ♡　さやのおっぱいの中で服従射精しろ♡」

激しく交互に乳房を擦り合わせ、沙耶香ちゃんは亀頭を潰し、くびれに潜り込んだ乳肉を振動させて摩擦させる。既に弱まりきったペニスの性感帯を激しく責め立てられる快感に、僕は我慢する間もなく射精してしまう。

ぴゅるっ♡　ぴゅるぴゅるっ♡♡　ぴゅるるっ♡♡♡

僅かに残っていた精液が、沙耶香ちゃんの谷間に吐き出される。深い谷間を埋め尽くすことも、胸奥を汚すこともできない、情けない射精だった。

「ソッコーでマゾ汁ピュるっちゃったねぇ♡　ざっこ♡」

鼻で笑った沙耶香ちゃんが、僕の身体からおっぱいを離して谷間を見せつけてくる。乳房に僅かばかり張り付いた数滴の白濁液が、敗北感を強めた。

「じゃあね、慎吾くん♡　さやの金づるマゾ一号としてこれからも頑張れ～♡」

シャワールームへと向かう沙耶香ちゃんを見送り、僕はそそくさとズボンを履いてホテルの部屋を後にしようとする。

「あ、これもう要らないし慎吾くんのお金で買い取るから持って帰っていいよ」

部屋から腕だけを伸ばし、沙耶香ちゃんが渡してきたのは先ほどまで彼女が身に付けていた水着。持っているだけで、ふんわりと甘い匂いが香ってくる。

「おっぱいフェロモンと汗が染み込んでるから好きに使っていいよ～♡　じゃね♡」

それから、家に帰った僕が寝食を忘れて沙耶香ちゃんの新作ブルーレイと、画面に映る彼女がきているのと同じ水着に染み込んだ匂いをオカズに自慰に耽ってしまったのは、言うまでもない。